



理事会だより (2・11オービックビルにて)

一、小田原梅の里さんば俳句大会は入賞者確定し作品集・賞品を二月十五日発送。次回以降の締切設定や作成資料等要検討の提言あり、今後検討する。

桜まつり俳句大会の現時点投句は七十名百二十五組 (事業部)

二、定期総会の議案書案を本日の理事会準備会で内容確認したので三月理事会に諮る。(総務部)

三、三年度文化祭俳句大会は市の行事として行なわれない(三の丸ホール開設行事のため)ので協会独自に実施する方向で詳細を今後検討する。

四、各部報告 総務部・けやき4階サークル活動室の紹介、来期会員登録届けを三月理事会までに。広報部・神奈川県視覚障害者協会文芸コンクール作品選考終了、文化連盟へ協会報を提供する旨の回答。会計部・来期会費は四月末までに。

五、佃名誉会長の協会報寄稿「俳句の岸边」一覽が会長より検討頭出しとして提供された。

「俳句おだわら」10句抄 (642号より)

神山つとむ 抄出

冬紅葉裏もおもても水鏡  
立冬のたたみかけ来る波の音  
いつになくながき湯浴や冬はじめ  
懐かしきものに貧しさ隙間風  
隙間風夕餉の膳を覗きけり  
丘といふ大きな日なた小六月  
朝晩は森ヒンヤリと藪柑子  
大根の肩抜き揃ふ在所畑  
ぐちやぐちやの夢の朝や寒鴉  
冬ぬくし生きる力となる電話

竹下由里子 抄出

垂直に冬の来たりぬ新宿区  
丘といふ大きな日なた小六月  
クリスマス・イブ膝の猫裏返す  
着ぶくれて縄文人の貌になる  
皿小鉢ふれて音せり神迎  
画鋏照る案内板や小鳥来る  
冬林檎くるくる剥いて喜寿迎ふ  
十二月八日血圧正常値  
読了の完の一字冬の月  
誰れかに何かを知らせたかつた冬木

近藤 久江  
伊藤はる子  
門松 鳳文  
陌間みどり  
小澤 純子  
池田 忠山  
青木たけを  
新井たか志  
村場 十五  
中村 昌男  
瀬戸 悠  
池田 忠山  
寶子山京子  
木村 和彦  
西賀 久實  
中山智津子  
守屋 まち  
鳥海 壮六  
一ノ瀬茂代  
瀬戸 正洋

## 令和二年度小田原梅の里さんぽ俳句大会

新型コロナウイルス下で梅まつりは中止となり、大会名称を変更し、兼題作品のみ募集・表彰となった。

「梅」「鳩」で二六二組投句。

神奈川県知事賞

少年の今日も無口やかいつぶり

山本 すみ

小田原市長賞

梅開く村がそはそはしてきたり

長谷川きよ志

小田原市観光協会会長賞

ポップコーン弾けて城の梅ま白

豊田 幸枝

小田原箱根商工会議所会頭賞

レシートのあららら長し梅日和

石川 久子

神静民報社賞

断ちきれぬ地縁血縁梅真白

守屋茂々子

小田原俳句協会会長賞

かいつぶり水面の影を裏返す

大澤 秀子

小田原俳句協会賞

まだ少し残る余白へ梅ひらく

加藤かほる

ひしめいて鳩湖をふくらます

中村 昌男

梅匂うそしてひとりの夜が来る

木村 和彦

里山の大きな呼吸梅日和

中根登美子

文豪の古き表札梅香る

田淵 令子

## 選者特選賞評

しらうめの 白をぬけゆく 夢幻能 城川 乎老

能はもちろん夢幻能を觀賞したことは無いが、この世のものでは無いものが夢の裡に肉体を音も無く過ぎて行くのか。無常感ここに極まるか。色彩以前の白を抜けて行く。夢かうつつか分らぬままに。夢幻は無間地獄への最短距離にあるのかも知れない。(佃 悦夫)

梅真白鳥のことばと陽のことば 近藤 久江

一読して句材から、梅園か梅林の景が見えて来る。それは表面であって、中七下五の「ことば」のリフレインの技法で、ゆったりした雰囲気を清楚な「白梅」を讀えて、早春を醸し出している。読み手はたつぷりと、春の心持ちを味わえたのである。(新井たか志)

どの道を帰るも城の梅に出る 長谷川きよ志

通い慣れた小田原城での一句と拝読。登城時の梅俳句が多い中、帰りの句として類を見ず新鮮。確かに城からの帰りの道はいくつかあって、少ない梅ながら濃密に咲く。作者はそれこそが「城の梅」だと実感したのだ。その断定と末尾の「出る」に納得と共感。

(池田忠山)

浮き上がる鳩に日差しを惜しみなく

伊藤はる子

つゝましく住み古る家や梅真白

大澤 秀子

日をためて鳩のねぐらとなる枯州

小澤 園子

曳いた手を今は曳かれて梅見かな

住吉喜代子

梅咲くや父八十の歎使ひ

高橋久美子

過去帳に母の名を足す梅月夜

日高 朝代

開け放つ尊徳生家梅香る

清水 吞舟

人に会ふことなき一日かいつぶり

小林 環

唄ふ児の歩巾に合はす梅日和

長島 久江

選者特選賞

(小田原俳句協会名誉会長) 佃 悦夫特選

しらうめの 白をぬけゆく 夢幻能

城川 乎老

(小田原俳句協会顧問) 新井たか志特選

梅真白鳥のことばと陽のことば

近藤 久江

(小田原俳句協会会長) 池田忠山特選

どの道を帰るも城の梅に出る

長谷川きよ志

(小田原鹿火屋代表) 近藤久江特選

古地図手に巡る城下や梅日和

清水 吞舟

(こよろぎ代表) 神山つとむ特選

松田ます子

(零俳句会代表) 伊藤 道郎特選

しらうめの 白をぬけゆく 夢幻能

城川 乎老

古地図手に巡る城下や梅日和

清水 吞舟

古地図を手に城下を巡られたという。私も古い街並が好きなので、感銘を受けました。

小田原は街角の随所に旧町名とその説明が石や立て札に標されている。いつか、往時を思い浮かべながら歩いてみたい。当時の人々の声や生活の様子に出会えるかもと思う。  
(近藤久江)

百歳の母よ百万本の梅

松田ます子

百歳のおかあさんを讃える歌ですが、百万本の梅の花をあげましょうかという発想が素晴らしいです。百本のバラと言う話は聞いたことがあります。百万本の梅と言う飛躍に感動しました。百歳の母を持つことは誇りですね。いうことなしです。すばらしい、幸せですね。  
(神山つとむ)

しらうめの 白をぬけゆく

夢幻能

城川 乎老

思わず目を止めた一句。その昔白拍子と言われる歌舞一団がいた。今の歌舞伎とは逆に女が男役を演じる。そんな雅な世界へ誘ってくれるようだ。そして平仮名表記が一層幻想的な世界へと誘う。「しらうめの 白をぬけゆく……」という诗情豊かな展開に詠むものはさ迷い始める。能の奥に潜む深い闇にひと時現を忘我する。  
(伊藤道郎)

「新作8句」鑑賞（二月号より各一句を鑑賞）

梟は流刑の帝知つており

佃 悦夫

ふくろうカフエなどもあり、人に親しまれ、一見穏やかで大人しそうだが、本領は、夜の狩人の異名をもつ猛禽であり、夜ふけに音もなく飛んで鼠などの小さな哺乳類を捕えたら逃がすことはない。止まり木上の梟は森の賢者（知恵の象徴）であり、集落の守護者（見張役）でもあるが、反面、鳴き声は死の前兆を表すとされた。古語は飯豊。そういえば飯豊天皇などがいて、面白い。なぜか映画『ガールの伝説』までもがちらつきだした。

（小島ノブヨシ）

いちまいの風へひとすぢ初明り

池田 忠山

元朝の浜辺。波が千歳の時を刻んでいる。折しも天より一条の光が。それは生命を育む太陽の恵。幾多を乗り越えた作者の体内に再び満ちてくる力。天と地と世俗の全てを「一枚の風」として捉え、「いちまい。ひとすぢ。初明り」と、まっさらな言葉を重ねつ、瑞々しい淑気を一句に込めた力強い作品である。

（須田聡子）

コロナ禍や神の楯欲し十二月

新井たか志

コロナ感染が拡大し終息出来ないまま十二月になってしまった。何か手立てはないものか？もしも神様の

楯があつたなら、感染をくい止める事が出来るかも知れない……。

作者の場合は神頼みではなく、自力で何かしなければならぬと思つている。人間の弱さを充分に知った上で、マスクをし、手洗い消毒などの小さな努力をする。それがやがて神の楯に近づくとは私は信じたい。

（岡田典代）

鳴っている二つ並んだ春の□<sup>はこ</sup>

大石 雄介

鳴っている「はこ」って何だろう。オルゴールか絡繰り人形か、初詣のお賽銭箱とか。二つ並んでいるとなると、心臓の鼓動か肺の呼吸音かしら。それとも二人つてことかなあ。本当は「はこがまえ」が鳴つていたりして、などと想像はどんどん広がります。そんな理屈はさておき、この句は初春の喜びが響きあつている感じがして、いいなあと思います。

雄介さんの句にはいつも不思議がいっぱいで、とても魅力的です。

（杉山あけみ）

いもうとがいちばん怖い石路の花

木村 和彦

言い得て妙なり。どこの家庭でも兄妹の多い方は起こりうる現実です。私には威圧的な姉がおり、約五十年前から海外生活なのでびのびしております。作者の方の妹さんは石路の花ですから、きつと地味な芯の強い方だと想像しました。こういう句は、はじめてお

目にかかりました。どこにでもあることを題材に句になさるとはおもしろい。兄妹の関係は一生続くと思われず。兄妹間の摩擦や衝突が人間を成長させてゆくものだと思われず。

(小澤園子)

柀挿す門にひらけし日本海

瀬戸 悠

節分の夜、門に柀の小枝に焼いた鯛の頭を挿し、鬼や邪気を家に入れない風習があると聞いているが、私は実際に目にした事はない。今でも残っている地方があるのだろう。海沿いの景色、二月の日本海が浮かびます。下五でスケールの大きな句になりました。

これで疫病コロナも退散してくれたらと、願います。

(山田照子)

蜜柑挽ぐ日は函嶺の上にある

鳥海 壮六

この句の中七から下五にかけての表現には作者の二通りの正直な気持ちが込められていると推察しました。

山の頂上にある太陽は、じきにすとんと落ちて行くが、今日は思いの外沢山の蜜柑を収穫できた喜びそして疲労感。と、鈴なりの蜜柑畑を前にして、まだまだ挽がなければの焦りの気持が、太陽を函嶺の上から引き戻したい思い、とが「日は函嶺の上にある」と表現されたのでしょうか。「日」とあえて使われた言葉の本意は一日とゆう時間帯の意味もあったのかとも感じました。

(小林永以子)

俳句おだわら(2・19メ切り、到着順)

◆零(1・21)

道郎報

第九より新世界より除夜の鐘

青木たけを

冬青空丹沢の威と分かちあう

中村 裕子

父好きな石路の花今さかり

井上 良子

病歴も苦悩も秘密冬帽子

岡本 史郎

冬帽子ヤクルトやさんの赤い頬

川合 昌子

里山は枯色石路の花咲ける

野川木 一路

冬帽子寝癖なだめて日の出かな

佐藤 正子

水仙の匂い届けよ黄泉のそら

木村 和彦

冬帽を地蔵にかぶせ童女笑む

伊藤 道郎

◆鹿火屋(1・22)

久江報

分かちあふ鎮守の灯年立つる

足立 和子

大寒の陽ざし手に受け退院す

川本 育子

春浅し土鍋こと湯気立てり

高橋 小糸

鯉はねて水輪ふくらむ春隣

山崎 悦子

初硯硯の海よりちちのこゑ

近藤 久江

◆沈丁(2・6)

文子報

少しだけ瘦身になる嗚呼春暁

寶子山京子

春暁や魅惑のワルツいと可笑し

牧石美千雄

春暁や静かに動く母の影

若村 京子

春暁や厚切りパンにホットテイ

柳澤ミサ子

春暁や長崎行きの切符買ふ

田中 恵一

春暁や目覚めの女神ほおにキス

河本 純子

さわさわと番も我も梅日和

瀧本 敦子

春暁は初まりの色今日の色

勝木 澄子

父となる産声聞くや春暁

菅野 英余

春暁のラジオ体操大気吸ふ

高井 幸子

神鶏の鋭眼まどろむ梅日和

片野 節子

春暁やガタガタ回る洗濯機

中野 文子

◆青梅(2・10)

幸子報

梅が香の畑を覆いて人も呼ぶ

大塚 行人

軒下に味噌玉吊す爺と婆

湯本とし子

深閑として方丈の浅き春

加藤まり子

暮早し野良着のままの厨事

久保寺トミ子

恋猫よ寝かしておくれ午前二時

田渕 令子

切干しや里に住み慣れ五十年

田中 幸子

◆香雨・梅ごち(1・17)

忠山報

マドラーに欲しき氷柱のひとかけら

肥後ちさこ

淑気満つ肩を張りたる大鳥居

関戸わよこ

氷柱から夜すがらつらら生まれけり

青山 典子

枝先に蓄したため春を待つ

門松 鳳文

月光を身ごもる軒の氷柱かな

乾 利子

日溜まりに影も動かず寒の鯉

吉田 百代

ねんごろに巻きぐせただし初暦

吉田 康雄

艶やかに夜を脱ぎゆく氷柱かな

陌間みどり

境内にひかりの戻り冬木の芽

小澤 純子

初空へ扇返しに鳩の群むれ

池田 忠山

◆こよろぎ(2・11)

つとむ報

力ぬき喜びすこし春衣

板谷 雅泉

飛行機の富士に向かえる建国日

植松テル子

初春やあるもののみな淑しよくとして

神山つとむ

◆みなみ(1・16)

かほる報

元朝や気付けば正座しておりぬ

小瀬村信子

向う気の強い孫好き冬帽子

加藤れい子

冬の鳥番でとまる枝の先

村上 龍山

冬鳥来声の若きを置いて去る

加藤 富江

老いて今子供に貰うお年玉

加藤 幸子

千両や巻きぐせ直すカレンダー

豊田 幸枝

底冷えの空気弾ける鉄砲音

市川めぐみ

膝に寄る児に陽の匂い冬帽子

斎藤 静

髪薄き恩師に似合う冬帽子

加藤 健治



駅伝にたつぷりつかる三ヶ日  
飯田 愛  
風がみな彩さらい行く冬野かな  
加藤かほる

◆春野(2・11) きよ志報

これだけは姉に譲れぬ恋歌留多  
内田知江子

魑魅が来て共に合掌山始  
秋山 昇

恍惚と年を重ねて海鼠食ふ  
瀬戸 悠

裏木戸を挟じ開けて来る寒波かな  
尾崎 一夫

空っぽのバスが又行く寒さかな  
二見 和江

母の背のやうにふつくら干し布団  
伊藤はる子

初場所やコロナに勝てぬ大男  
長谷川きよ志

◆山北(1・20) 由里子報

鬼子母神へ急な坂道息白し  
中山 妙子

寒き夜や電子レンジの回る音  
和田恵美子

薬局に長椅子一つ日脚伸ぶ  
石田加津子

帯めて少しおどけて女正月  
尾崎 幸子

初富士や箱根吾妻と丹沢と  
柳川 楊雨

古郷の山金色に初明り  
高橋 秋月

しばらくは光の中のランドセル  
尾崎 竹詩

うしろ向きに歩く五、六歩野水仙  
竹下由里子

◆開成(2・5) ちわき報

虎落笛日がな一日籠もりたる  
遠藤シヅ子

鶏鳴の窓開け放つ春隣  
下澤 操子

春隣の土曜日曜よく晴れて  
濱本 主雄

空と地に広がる光春近し  
奥津ちわき

◆たけのこ(2・12) 悦女報

箱根路や冬木の先の雲の海  
久津間百合子

輝ひて春は空より水面より  
小宮 早苗

庭に咲く梅の一ト枝子は父に  
三木 泰子

投薬を小分けにしたる春の星  
徳田 公子

春一番意地の夫婦の畑仕事  
宮崎 悦女

◆おほる(2・10) 昌男報

春立つや聞こえて来そう進化論  
中村 昌男

日向ほこ乗らば浮雲何処ぞゆく  
廣田 悦子

雪の夜生れし我が子清くあれ  
二上 光子

遠ざかるテールランプや名残雪  
石井きよ子

古新聞束ねる夫や春立つ日  
石井千代子

反り返る下仁田葱や妻の留守  
小野 菊土

幾山河越えて風花舞い降りぬ  
香川 花子

目で測る気温の低下山に雪  
風間 秀泰

大空の僅かな憂い冬夕焼  
加藤 春江

節分会老いの身さらし鬼になる  
坂入清四郎

梅真白はははの笑顔に出合いそう  
瀬戸とみ子

春めくや予定なき日の薄化粧

高橋みどり

七日爪懐紙にとるや形見めく

西賀 久實

老い一人未曾有の雪に地域の輪

中津川晴江

流木に霜みつしりと中洲かな

佐宗 欣二

霜柱一步一步に生きる音

中根登美子

新玉の堤の松や酒匂川  
ベビー靴脱ぎたがる子や山笑ふ

須田 晴美

◆実のり(2・18)

たか志報

黒猫の低き構えや昼の蝶

岩本ひさみ

立春大吉主婦の肩書なき名刺

百川 秀子

紋白蝶明るき午後の通学路

杉本 久子

大縄飛びかけ声山に笈せり

山崎美知子

春耕や風が背を押す霞堤

木村 幸枝

前垂れに屋号截然初市場

庄司 下載

クレソンの青き風生む野川かな

新井たか志

しぶき散る室内プール冬日差  
まぢまぢの椅子の五六やどんど焼

瀬戸 りん

◆零(2・18)

道郎報

母の忌やどれも美し春の星

中村 裕子

めくれつつ燃ゆる日記や日脚のふ

高橋久美子

土筆掘る冬虫夏草かも知れず

岡本 史郎

ぼつぺんのぺこんと鳴りて海たひら

中山智津子

春泥を歩いて親に叱られた

井上 良子

海光をはるかに大根干しにけり

齊藤 桂

堤にも喜び来たり土筆んぼ

川合 昌子

春近しプリンの匙の平べつた

芹澤 常子

春泥や迷いながらの着地点

佐藤 正子

寒に入り滅法波の高きかな

畠 梅乃

春泥を越さねば行けぬ釣り穴場

野川木一路

春日頃現金主義や十二月

山口安規子

「早春」と名付け土筆を描き足しぬ

青木たけを

こゆるぎの磯のどんどに噎せにけり

市川 好子

春寒し今日は豆でも煮てみるか

木村 和彦

初富士や鏑矢羽根の大切斑

大島美恵子

妻よまた朝な夕なに土筆和え

伊藤 道郎

縁先の沓脱ぎ石や実千両

田下 昌人

◆鷹(2・6)

十五報

潮の香と土の匂ひの初荷かな

青木 孝子

凧揚や江の島の空近うせり

高橋 正子

立春の空港ピアノ手を待てり

池田 令子

小豆粥喰うて我身の邪気払ふ  
轍や昔は誰も貧しくて

西村 英子  
米山 翠



初写真けふは口紅少し濃く  
父植ゑし老梅上枝ふた色に

大木 敬子  
加藤 幾代

交番は警邏中なり嫁が君

北崎 修

アロエ咲く海鳴聞いて母の家

守屋 まち

春支度命日ばかり増えにけり

來田 新子

梅白し靴の汚れを洗いけり

大沢 年子

口紅はサーモンピンク真砂女の忌

片野 秋子

梅咲くや籠りし夫の髪を切る

小林 環

夕霞ゆづる人なき水仕事

近藤 絢子

朝霞駅に海拔表示板

鳥海 壮六

初午やひかる雲積む芙蓉峰

古屋 徳男

奥入瀬の奔湍せまる木の芽かな

村場 十五

◆雫の会(2・19)

重満報

梅白し向こう岸よりハイタッチ

井上 和子

はらわたに冬三日月が嚙み付いた

佃 悦夫

生の菜花喰めば別れの想いかな

佐々木重満

◆無所属

小林永以子

拾ひきし梅の小枝の意地三分

山口 千代

牛歩する暮しを今に餅を焼く

北村 文江

雪女視界不良も手探りで

北村 文江

立枯れの葦の川原にさす薄日

一ノ瀬茂代

人日やひとりの為の紅茶淹れ

出澤 洋子

裏梅の市章を冠し感謝状

蓑宮 わか

落ち椿自画に自賛の美花なると

鈴木久美子

陽の匂ひ余るほど浴び干大根

木村美千代

コロナ禍や尾をいそいそと恋の猫

澤口 文子

唐土へと音立てて打つ薺かな

山田 照子

幸せの足音聞こゆ春一番

穂坂志げる

逃水の逃げ足ウイルスの変異

杉山あけみ

足の爪ぼろぼろ牛蒡蒔きにけり

瀬戸 正洋

ものの芽や絵の具にはなき色秘めて

小澤 園子

春の陽の暖色パワーに目覚めたり

岡田 典代

冬風のへりコプターのかたまりかな

大石 雄介

長子生れ水金地火木土天海冥

大石 和子

馬車道や姉も老いたり春ガス灯

岩楯恵津子

伊達眼鏡かけ梟の息づかひ

小島ノブヨシ

高みへと飛翔の一羽初御空

須田 聡子

煮凝の無念という目と合いにけり

田畑ヒロ子

◆お詫びと訂正◆(二月号)

7頁下段の最後に追加

茶室より十歩の若井汲みにけり

米山 翠

## 齊藤 桂

十歳に言い分のあり女正月

瀧本 敦子

「女正月」という季語は江戸時代にできたらしい。「年末年始のあいだ多忙だった女性が十五日ころになつてようやく手があき、年始廻りに出かけたたり、女性だけで慰労をかねた集まりをする。」と歳時記にある。この習慣は現代ではあまりないのではないか、否、そんな余裕がないのが実態か。年末年始、女が忙しいのは残っているが：女だつて子供だつてそりゃあ言い分はありますよ。ジェンダーが叫ばれる昨今、気になる一句であつた。

老僧の物知り顔や十夜粥

高橋 正子

この句には作者の老僧への皮肉めいた視線を感じる。和尚様が「お十夜とは：」などと蘊蓄を始めたのだからか。年を重ねることは尊いが物知りをひけらかされるのは勘弁してほしい。うろ覚えではあるが、兼好法師が、老いた僧正を「あらたふと」拜む人々の姿を見て、老いさらばえた犬を引いてきて「たふとの景色でござろう」と皮肉った段を思い出した。物事を立場や表層だけでは見ない作者の姿勢に共感した句である。

## 畠 梅乃

履物を平たく揃へ女正月

寶子山京子

正月の慌ただしさから解放され、女性だけで集まる「女正月」。伝統的で華やかさを感じさせる季語である。この句は玄関の様子だけでその雰囲気を出したところが秀逸である。「平たく揃へ」るのは、きつと草履なのであろう。晴着の女性たちが次々に草履を揃えて部屋に入つてゆく様子が想像できる。また、先に部屋に入つている女性たちの晴着を褒め合う声、持ち寄つた料理の美しさに感嘆する声なども聞こえてくるようである。

大根煮る円周率のうやむやに

加藤 健治

男性の句だが料理をされる方か。大根が煮崩れて円が曖昧になったという句かもしれないが、実際に作者が円周率を考えている句と読みたい。大根の皮がきつと上手に剝けたのであろう。真円に近い大根を煮ているうちに、ふと面積の公式を思い出した。円周率は何桁まで覚えた世代か。今はもうすらすらと言えなくなくなってしまった円周率。大根の断面積を出すだけなら円周率3で十分だと思うが、几帳面な男性の料理を見るようで面白い。

## ◆理事会日程

3 / 11、4 / 8、5 / 13

## ◆第68回定期総会

4 / 22 いずれも木曜日6時から

小田原俳句協会

〒二五〇一〇〇二二 小田原市本町二一三二

池田 忠山方